文学者と図書館（1）

滝沢正順

1

詩や小説などの創作をする文筆家・文筆業者のなかには、はじめから筆一本の生活をしてきたという人もいるが、なにか別の職業を兼ねているとか、かつて他の仕事についていたという場合もしばしば見受けられる。文筆業は経済的にはかなり不安定であるし、文筆家として認められる前の生活の必要という場合もある。（もちろん他の理由のときもあるだろうが）。

そうした仕事のなかで、もっとも多く例をあげることができるのは、おそらく出版・ジャーナリズム関係と教員（大学もふくめて）ではないだろうか。ほかにもたとえば医師で作家などというのは何人も名前を見つけることができそうである。ここではそうした兼業や前歴に見られる仕事から、すこし特殊なケースだが、図書館の館長と司書の場合をとりあげて例をあげてみたいと思う。

文学者と図書館というのは、結びつきそのものは一般的にいろいろありそうである。作品の印刷された本や雑誌はもちろん図書館の蔵書になるだろうし、調査や取材で利用することもあるだろう。青少年期に図書館を利用したことを回想している人も多いようである。その図書館を仕事として選ぶのに理由をさがせば、たぶん「本」との関係をもつということが理由のひとつなのではないだろうか。本との関係ということなら書店の場合もあり、田山花袋やヘルマン・ヘッセは書店員をしたことがあるし、矢崎嵯峨の屋は老年になってから書店主になっている。創作のなかなら例えば佐藤春夫の「都会の憂鬱」に文学青年の古書店員が出てきたりする。

これから記すいろいろの例は、本人の書いたものによる場合もあるし、その他のさまざまな本・年譜・事典等々から抜き出した場合もある。典拠をいちいち記すべきなのかもしれないが、煩瑣になると思うので初めだけすこし注記してみて、あとは省略させてもらうことにする。敬称も略させていただくことにする。

なお、明治大学図書館の飯澤文夫氏にはいろいろご教示いただいた上、ご面倒もおかけしました。お礼申し上げるとともに、付記させていただきます。

2

いまの日本で最大の図書館というと昭和二十三年にできた国立国会図書館ということになるが、そこに勤めていたことでよく知られているのは「ナポレオン狂」で昭和五十四年に直木賞を受けた阿刀田高である。

阿刀田高が国立国会図書館でのことを随筆等に書いたもののなかには、事実ともフィクションともつかないことが出てくることがある。たとえば国立国会図書館の採用試験の面接で、どんな仕事をやりたいかと尋ねられ、「館長の仕事なんかおもしろいと思います」と答えたという（『まじめ半分』角川書店）。国立国会図書館の館長は国務大臣と同等の待遇とすると法律に書かれているくらいの職だから、この返答がもし本当なら相当の発言ということになる。

図書館員としての阿刀田高の書いたものには、各地の図書館を訪ねて紹介したものを連載したことがあるといい、また「現代読書論の類型について」という題のものが、昭和三十八年の『図書館学会年報』に載っている。

阿刀田高が国立国会図書館に勤めていたのは昭和三十六年から十一年間にすぎないが、同館には第一回室生犀星賞を受賞した詩人の滝口雅子が昭和二十三年から三十年近く勤めていた（『滝口雅子詩集』年譜、土曜美術社）。また第二次大戦後、国立国会図書館を設立するための審議をした国会の図書館運営委員会のメンバーには、当時参議院議員であった山本有三と金子洋文が入っていた。

3

中野重治の「司書の死」という小説は、創立当初の国立国会図書館の仕事でアメリカにわたり、帰国途中に病気で亡くなったある司書のことを描いた短編で、このなかに中村地平のことが一カ所出てくる。

中村地平は東京で作家活動をして故郷宮崎に帰り、十年間にわたって宮崎県立図書館長をしているのだが、それとちょうど重なる時期に、隣の鹿児島県では椋鳩十も県立図書館長を二十年近くしている。椋鳩十のとなえた母と子の二十分間読書運動は有名なので説明は不要だろうと思う。はじめ椋鳩十のもとで鹿児島県立図書館奄美分館長をしたのが島尾敏雄で、その作品「日の移ろい」には同館のことも出てくる。戦後の九州にはずいぶん小説家の図書館長が目についたわけである。

県立図書館では、俳人の飯田龍太が山梨県立図書館につとめていたことがあるし、歌人の大西民子も埼玉県立図書館（浦和・久喜）に十四年間にわたり勤めている。随筆のなかで大西民子は、図書館につとめたおかげで随分本のことを知ったと書いている。

埼玉県の隣、首都の東京で都立日比谷図書館長をしていたのが、やはり歌人の土岐善麿で、彼は日本図書館協会会長もつとめた。図書館長としての土岐善麿の大きな仕事は、いまも日比谷公園のなかにある三角形の図書館の建物を新築するのにたずさわったことのようである。現在は東京都立中央図書館が別にできているが、当時は日比谷図書館が東京都の中央館であった。

文学の創作をする人だけでなく、研究者までふくめて考えると該当者は増加することになるが、例をあげてみると中央館だった時の東京都立日比谷図書館長に杉捷夫、昭和五十六年からの都立中央図書館長である前田陽一。二人とも仏文学者で東大名誉教授である。

これまで県立と都立の図書館について名をあげたのは、いずれも戦後に関係した人たちだが、推理小説の江戸川乱歩は、大正四年まだ早稲田大学在学中に図書館で貸出係として働いたことがある。市立図書館としか書いていないが、

たぶん東京市なのだろう。

ほかにも明治時代の詩人、湯浅半月は、京都府立図書館長をしていたし、京都大学附属図書館に勤めたり早稲田大学図書館顧問にもなっている。

4

昭和二十五年に公布された図書館法では、公立図書館の館長は司書となる資格をもった人でないといけないとなっている。この資格をとる方法の一つに、毎年夏にいくつかの大学で開かれる司書の講習を受けることがある。土岐善麿や島尾敏雄はこの講習を受けて資格を取り、館長をつとめた。ところで大学にはかならず図書館や図書室があるが、そこで働いたという人もいる。

福岡県にある九州工業大学は、いまは国立だが、もとは私立で明治専門学校といっていた。大正六年にこの明治専門学校の庶務課に勤めた葉山嘉樹は、庶務課主任の数学の教員の排斥運動を始めたため、大正八年に同校の応用化学科図書室へと移ることになる。

「私はただ、本の表題だけタイプライターで叩けばよかったので、大きな図書室に、たった一人で、図書館長見たいに気取って、回転椅子の上にフンゾリかへってゐるのは、ものの十日位は面白かった。十一日目位から退屈してしまった」（「文学的自伝」）

その図書室のなかで葉山嘉樹は、ゴーリキー、ドストエフスキー、トルストイ、アルツィバーシェフ、上田秋成と手当り次第に読んだり、英語の授業を聞きに教室に出たりしたという。しかし大正九年になると彼は、明治専門学校をやめて名古屋へと出ていってしまう。

葉山嘉樹は出世作の「海に生くる人々」や「淫売婦」を、左翼活動で入れられた刑務所のなかで書いていたが、同じように左翼活動で投獄された島木健作は、刑務所に取材した「癩」や「盲目」で小説家として認められた。その島木健作は大正十二年に北海道大学の附属図書館に勤めている。もっとも翌年には同大学の農業経済学研究室に移ってしまうが、研究室での仕事は図書の整理が主であったというから、仕事の内容はことによるとそれほど変化しなかったのかもしれない。

北海道大学の附属図書館には、昭和三年から四年にかけて、東京外語を卒業したばかりの神西清も勤めている。また北海道のついでにふれると、小樽高等商業学校に学んだ伊藤整は、自伝的小説「若い詩人の肖像」のなかで、同校の図書館に勤めていた詩を書いている青年のことを記している（すこししか出てこないが）。その青年は、伊藤整が小樽高商の図書館に通い、そこで同じときに同校にいた小林多喜二の姿をしばしば見かけたという在学中に働いていたのだが、知り合ったのは卒業後のことで、在学中にはまったく記憶になかったというふうに、「若い詩人の肖像」ではなっている。

島木健作は図書館から研究室へと移ったが、その逆の移り方をしたのは瀬戸内寂聴である。昭和二十四年に京都大学附属病院小児科研究室に勤めた瀬戸内晴美は、翌二十五年に同科の図書室に移っている。図書室では「閑だったので私は一日中好きな本ばかり読んでいられた」といい、また少女小説を書いて雑誌社に送っては採用されたと書いている。瀬戸内の「罌粟」という短編は大学の図書館に勤める女性が主人公で、仕事は楽だったが給料は安かったとなっているが、作者の経験と関係あるのだかどうだか。

戦後の小説家では、真継伸彦も二十歳台に専修大学図書館に勤めていた。「鮫」で文芸賞を受賞するのは図書館をやめてから四年後のことである。

（つづく）

（東大機械工学科図書室）